ケニアの素材、日本の手仕事

石原邦子

NPO法人アマニ・ヤ・アフリカ 理事長

支援する側・される側の枠を越えた信頼と繋がりから生まれたものである。 それはお互いがお互いを気づかい、できることを模索した、 日本とケニアの架け橋となるべく活動をおこなうアマニ・ヤ・アフリカは、 「人のために、何かできることはないか」という思いは、一方向ではない。 ケニアの素材を使って日本の被災者が商品を作って販売するプロジェクトを始めた。

スラムの人びととの出会い

語でアフリカの平和)を立ち上げた。 台で、NPO法人アマニ・ヤ・アフリカ(スワヒリ この人たちとともに歩んでいきたいと思い、地元仙 た生活を送っていたわたしは、その手助けをしたい、 直にそう感じた。国際協力とはまったくかけ離れ 腹いっぱい食べる事ができる。学校にも行ける。 てた環境だった。親に仕事があれば子どもたちはお た子どもたち、 み入れて見たのは、学校にも行かずにお腹を空かせ 初めてスラムという存在を知り、そのなかに足を踏 ビのスラム街、 一九九九年一二月、 仕事のない大人たち、そして荒れ果 キベラ地区を訪れる機会があ わたしはケニアの首都ナイロ 素

技術者の自覚をはぐくむ

スラムに住む子どもたちの教育支援、そしてケニア ると、仕事をもたない若者たちへの経済的自立支援、 アマニ・ヤ・アフリカの活動内容は、大きくわけ

強くなった。そのため二○○九年に現地にスタッフ 指導をおこなうだけでなくその後の生活の安定が 生かした作品を作り、それをわたしたちにもち込 それをわたしたちが日本で販売するというフェアト 間程のティカ市に、現地の友人たちとともに洋裁の する日本人の方に活動費を寄付する形で進んでいっ ばん力を入れているのが経済的自立支援を目的とし と日本の文化交流の三つである。そのなかでもいち み、注文を受ける事で生活を向上させていく。技術 者としての自覚をもたせたい。自分のアイディアを 職業訓練所を開校させた。その卒業生たちが、 を派遣してNGOを設立し、ナイロビから車で一時 たが、自分たちも独自の活動をしたいという思いが わたしたちの支援活動は、最初はおもに現地で活躍 たフェアトレード活動だ。 んだ技術を生かしてバッグや衣類などの製品を作り ード事業を進めている。卒業生には、一人の技術 一九九九年から始まった 学

ナイロビにあるキベラスラム

スラムの職人たちとの活動は続いている。 らい、十分な工賃を支払う。この事を目標に現在も 陥ってしまうのだ。それを解消するため、 原価を割ってでも売ってしまう。そういう悪循環に 金で調達する。やっと在庫をもっても現金欲しさに て安く仕入れる事ができず、注文を受けてその前 出会った。資金がないために、彼らは材料をまとめ 素材(牛骨)を使いアクセサリーなどを作る職人と 活動のひとつだ。 スラムに住む人たちとのフェアトレードも重要な -に対しては丁寧で確実な仕事をしても ケニアに通い始めたころ、 わたした 身近な

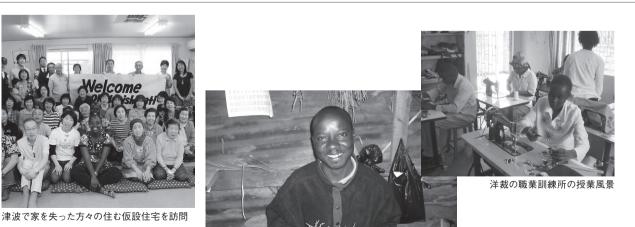
に通えるようにと、フェアトレード商品の売り上げ う。わたしたちは少しでも多くの子どもたちが学校 受け、仕事をもつ大人が増えれば、路上にあふれる へ進学するための学費支援などもおこなっている。 教育はすべての基礎となるものだ。学校で教育を 小学校への支援金やスラムの小学校から高校 トチルドレンや悲しい虐待なども減るだろ

合いになった。 知人を通じて、 ランティアで被災地に野菜などを届けて回っている 実感したのである。落ち着きを取り戻したころ、ボ ともに作り上げてきた信頼関係が実を結んでいると 映した映像はインターネットを通じて日本側に届き、 きながら無事を祈ってくれた。その祈りの様子を の生徒たち、フェアトレードの仲間たち、 台が大変だ!」。スラムの子どもたち、 そして三月一一日に東日本大震災が起こった。「仙 わたしたちは何とかそのグループと ある仮設住宅の婦人グループと知り 職業訓練所 誰もが泣

> なるプロジェクトをおこなった。 校の先生の給料として使われる。そんな一石三鳥と その工賃と材料費を差し引いた金額はスラムの小学 仮設住宅に住む女性グループが工賃をえて、そして これによって、 作り、包装、販売をするのが女性たちの仕事である が送られてくる。それらを組み立ててストラップを 作られた小さな動物や、 を作るということだった。ケニアからバナナの葉で 思いついたのが、ケニアの材料を使って日本で商品 るだけでは心苦しく思っている事を知った。そこで ケニアとの繋がりをもてないか模索した。付き合っ いくなかで、 仮設住宅に住む人たちは支援を受け ケニアで半製品材料を作る人たちと ビーズなどの半製品材料

分たちは何て不幸なんだと思っていたが、今自分た 住宅に住む人たちが元気を取り戻せるようにと、 住み、苦しい生活を送っているのだが、彼らは仮設 **驚いた様子だった。自分たちもスラムという環境に** てくれたり、その他にもさまざまな支援がある事に に起こった出来事に涙しながらも、 事を知ったからだ。ケニア人の二人は、被災者の方 援も受けられない人たちが地球上には沢山存在する そこで聞いた話に被災者の皆さんは励まされた。自 ムから教師二名が仮設住宅を訪問する機会に恵まれ い長いお祈りをしてくれた。 ちがしている様な生活が当たり前で、国から何の支 繋がりはどんどん深くなり、 昨年はケニアのスラ 国が家を用意し

にアフリカをもっと知ってもらう為に行動し続けたい。 けるよう、そして互いの交流をとおして日本の人たち なり、ケニアの人たちが仕事をえて幸せな家庭を築 わたしたちはこれからも日本とケニアの架け橋と



バナナの葉で作品を作るマイナさん

